

第4学年Ⅰ組 体育科学習指導案

令和6年10月29日(火)

第4学年Ⅰ組(21名)

場所 小林市市民体育館

指導者 坪田啓介

1 単元名 ネット型ゲーム(ソフトバレー・ボール)

2 単元の目標(第3学年及び第4学年の2学年分)

- (1) ネット型ゲームでは、基本的なボール操作とボールを操作できる位置に体を移動する動きによって、易しいゲームをすることができるようとする。
(知識及び技能)
- (2) 規則を工夫したり、ゲームの型に応じた簡単な作戦を選んだりとともに、考えたことを友達に伝えることができるようとする。
(思考力、判断力、表現力等)
- (3) 運動に進んで取り組み、規則を守り誰とでも仲よく運動をしたり、勝敗を受け入れたり、友達の考えを認めたり、場や用具の安全に気を付けたりすることができるようとする。
(学びに向かう力、人間性等)

3 運動の一般的特性

中学年のゲームは、「ゴール型ゲーム」、「ネット型ゲーム」及び「ベースボール型ゲーム」で構成され、主として、規則を工夫したり作戦を選んだり、集団対集団で友達と力を合わせて競い合ったりする楽しさや喜びに触れることができる運動である。

低学年のゲームの学習を踏まえ、中学年では、ゲームの楽しさや喜びに触れ、その行い方を知るとともに、基本的なボール操作とボールを持たないときの動きによって、易しいゲームができるようにし、高学年のボール運動の学習に繋げていくことが求められる。

4 児童の実態

(1) 運動に触れる楽しさの体験状況

本学級では、日常的に運動に親しむ児童が多く、昼休みには、多くの児童が運動場や体育館で遊ぶ姿が見られる。

これまでの体育科の学習を通しては、3年生から体育専科教員が体育の授業を行ってきた。技能面において個人差はあるもののすべての単元において進んで授業に取り組む態度が見られた。一方で、ゲームの単元においては勝敗にこだわるあまり、感情的になる児童も数名いた。

(2) 「知識及び技能」、「思考力、判断力、表現力等」、「学びに向かう力、人間性等」の習得状況

「知識及び技能」に関しては、3年生時に実施したキャッチバレー・ボールの学習において高く上がったボールや速いボールなど、様々な動きをするボールをキャッチする練習を行った。練習を通してボールの方向に体を向けたり、ボールの落下点やボールを操作しやすい位置に移動したりすることができる児童が増えた。しかし、ボールをはじいたり、打ったりする動きには取り組んでいないため今後の課題として考えられる。

「思考力、判断力、表現力等」に関しては、仲間の動きや様子を見て、アドバイスをする活動に取り組んできた。課題解決のために必要な「ポイント」を話し合うことで、仲間に何を伝えればよいかが、少しずつ分かるようになってきた。しかし、技能についてのアドバイスはで